柱時計の音

細川忠雄

柱時計の音

細川忠雄

文藝春秋新社

柱時計の音

著者略歴

明治42年山梨県に生る。
昭和7年東京外国語学校仏語科卒。
読売新聞社渉外部長，文化部長等を歴任の後，現在編集局参与。読売新聞夕刊のコラム「よみうり寸評」を執筆中。
現住所　東京都荒川区三河島4ノ3206

昭和三十六年四月三十日　発行

定価二九〇円

著作者　細川忠雄（ほそかわただお）

発行者　車谷弘

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座銀座七八七四三

印刷　理想社
製本　福神製本

万一落丁乱丁の際はお買求めの書店又は発行所にてお取替致します

© 1961 Tadao Hosokawa　　Printed in Japan

目次

一家眷族

父子鳶 11
誓って家を出たからにゃ 15
人間になれ 25
黄金の腕 27
オヤジさん 36
わが家の〃秘密〃 37
祖父馬鹿ちゃんりん 40
ある〃インテリ〃 43
記者と人生 46
動物たち 56

四季おりおり

月景色 59
初笑い 60
ナンテンの色 61
寒気と生命力 62
強風 63
小鳥 64
春の花々 65
山はこわい 66
ささやかな自然 67
四万六千日 68

生きている間

不安な美しさ 69
登山靴 70
アサガオ 71
ひとりごと 72
秋の足音 73
何事も若いうち 74
「つづれさせ」の声 75
ガード下 76
叛骨のしるし 89
隠居は過褒 90
赤いハンドバッグ 91
別居と同居 92
メソメソしない子 93
人生四十八手 94
秋暑し 77
花のいのち 78
下町のしぐれ 79
迷を知る 80
たき火 81
冬の訪ずれ 82
イチョウの木と子供 83
除夜の安らぎ 84
死者の与えるもの 95
母の日 96
ハトと坊や 97
食欲 98
時が来なければ 99
酒と酒人 100

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

食べ物には通なし 101
子供の生命力 102
大衆食堂で 103
生きている間 104
アンファン・やりゃがる 105
捨て犬 106

あの人・この人

日本人・大観 115
アウトサイダー 116
八十翁の壮美 117
死所を得たり 118
利と義の悟り 119
文学者の姿勢 120
切実な目玉 121
六代目の芸道根性 122

笛づくりとニコヨン 107
二人の子供 108
巨人旋風 109
個性と風格のある町 110
こっちからのお願い 111
三つの碑 112

勝負師的ロマンチシズム 123
強いばかりが男じゃない 124
政治家は弱虫 125
二流の人 126
内助の功 127
最後の武人 128
異境に在る人 129
動物的な俳優 130

仏魔和尚 131
軍人とゴルフ場 132

筆は一本・箸は二本

ひまと閑暇 137
実行者と批評者 138
標準語 139
芸の描く人間 140
鋲打ちとゴルフ 141
機心忘るべし 142
私も犬になりたい 143
難解に非ず不解 144
殺し屋 145
弱者尊重の精神 146
「腹いっぱい」と「愛の金」 147
ビジョンの不足 148
ある俳人 133
無用者の系譜 134
自然の中の学校 149
筆は一本・箸は二本 150
錦のフンドシ 151
「再検討」と「善処」 152
飛ぶ鳥あとを濁さず 153
落語国の人々 154
日本独得の表現 155
モモクリ三年 156
父母同権論 157
大戦勝と後代の転落 158
コトバは保守的に 159
罪の意識 160

拙者静観しております 161
ユーモアとクスグリ 162
空だのみの災害対策 163
日の丸という十字架 164
市民生活をおびやかすもの 165
棒と球 166
サービス精神 168
社会のシツケ 169
ただ一つの正義 170
二人の若者 172
天下国家のこと
真空論の亡霊 185
本流と支流 186
ファッショの手口 187
因果はめぐる 188
マンモス都市の横顔 173
人類の灯台 174
アゴを引く 175
タワーリシチ 176
女の本能 177
君子自重 178
彼岸と此岸 179
五十の坂 180
悲しいうた心 181
十年の運命 189
第二組合全盛 190
政治の「そこつ」 191
ある朝眼をさましたら 192

国論には勝てぬ 193
「建国の精神」にかえれ 202
国民に任期なし 194
〃国民〃と申しても広うござんす 203
ご神体 195
三本の柱 204
喧嘩両成敗は不可 196
間接税に注意！ 205
吉田学校の系譜 197
数字の威力と魔力 206
〃忠誠を誓う〃相手 198
良心成長率 207
共産圏に対する無知 199
法律を支えるもの 208
理想論は〃女子供の説〃か？ 200
論理のすり替え 209
〃排共〃または〃討共〃 201

作家と作品

おやじと私 213
本格的な動物文学者 229
天性の詩人 224
原罪の悲哀 236
おことわり 249

柱時計の音

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一家眷族

父子鳶

だれもかれも、似たような学校で似たようなことを学び、似たようなサラリーマンに成る風潮は いったいどういうことなのか、大工でも床屋でも仕立屋でも、ともかく〃手に職を持つ〃ことに、 みんなもっと熱意を示してもいいではないか、といったことを一再ならず自分の受持つコラムへ書 いたが、じゃあお前さんはどうなんだいと言われれば、貧しいサラリーマンの一員として一言もな い。

せめて、倅には〃手に職〃を持たせたかったし、また結果においてそうなりかかっているが、あ りようは、決して計画的なものではない。けちな知識階級の一人として、やはり倅に「大学くらい は」出てほしかったのである。

倅は現在、都内のパン屋で職人見習として働いているが、同じ年ごろの金ボタンの若者を見ると、 寂しい気がしないでもない。この倅は中学を出た時、もう学校は沢山だと宣言した。亡妻がそのケ ツをひっぱたきひっぱたきして、やっと高校へ進ませた。どうやら落第もせず、二年まで行ったが、 これは亡妻の努力というより執念のおかげであった。

倅は母の死とともに、金輪際学校へは行かないと言い張った。高校の校長さんにも会い、いろい

ろ事情を訊いたが、一年ごとに学力が低下しているという。

一種の精薄児的傾向のある子だが、さりとて馬鹿というのではない。ともかく高校だけは、どんなことをしても出なければいけないというので、気分を変えるために、あるミッション・スクールの高等部へ転学させることにした。形式だけの編入試験を受ければよいというので、ほっとしたが、なんと付添っている姉が手洗いに行っている間に、試験場を脱出して家へ帰り、布団をかぶって寝てしまった。一家総動員で口説いたが、「いやだ」の一点張りで、「働きたい」と言う。

学校ぎらいの素質は、もともとあるのだが、ここまで追いこんだ責任は、父としての私にある。それを詳しく書くほどスペースはないし、それを書くと、随筆ではなく私小説になる（いつかは書きたいが、その時は「文学界」かなんかで芥川賞を狙う。ゴキタイを願いたい）。

七十六になる祖母がまず折れた。「いやなものなら仕方があるまいよ」と言い出した。泣いたり喚いたり、家中がこの倅に振り回された揚句、写真の技術を覚えたいというその意志に従い、H新聞社へ入れてもらった。社長のTさんと、友人のM君のご好意にすがった結果である。

無給で結構というのにちゃんと給金も頂き、写真部長のIさんは、わが子に対する以上の愛情を傾けて下さった。

この間二年、うち二回ほど、やはり得意の脱出を試みている。一度は町工場へ、一度は場末の映画館の映写室へ、職を求めてもぐりこんだが、そのたびに連れ戻し、Iさんのご好意で働かせても

らっていた。

だが、ついに、これ以上お世話を願えない事情に逢着した。今度は私も激怒した。「勝手にしろ」と突き放した。

ところが、本人にとっては「勝手に」振舞えることほど、解放感を与えたものはないらしい。すぐ職安へ出かけて行って、右のパン屋の口を探して来た。

祖母が泣いているのを尻目に、布団とトランクを抱えて、いそいそとして家を出て行った。決して怠け者ではない。働くことは好きなのだが、生まれついてからの劣等感が身にしみついている。四六時中ヘマばかりやるのだが、ちょっとしたことで、無性に仕事がいやになり、変えてみたくなるらしい。

ついこの間も、パン屋のご主人に家人が呼びつけられた。ちょっとした作業が、なかなか覚えられず、後から来た少年たちに、どしどし追い抜かれるという。涙の出る思いでその話を聞いたが、頑張れと言うほかはない。まじめにさえやれば、いつかは芽もふくというものである。

この倖も今年「成人」なので、一月十五日にお祝いを思い立った。

夕方、早くからスキヤキの仕度をして待っていたが、九時ごろになって現われた。御飯は済ませたという。

「何故家で食べない？」と詰問すると、

「父ちゃん、ひでえや、おれの成人は来年だぜ」という。
もう嫁に行っている長女も現われて、「父ちゃん、馬鹿じゃない？　倅の成人の年を間違えるなんて……」と言う。
お面一本である。かくの如く無責任で出鱈目な父親にくらべて、とにもかくにも手に職をもって、自活の道を得ようと努めている倅の方が、はるかに立派である。
十年か二十年か先き、「ホソカワ・ベーカリー」の二階かなんかで、細々と老後を送らせて頂けるかどうか、楽しみである。

（三三・一）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co